

『人間失格』再論

— 父神「エホバ」と神の子「イエス」 —

三 谷 憲 正

はじめに

- 一、太宰治と大庭葉蔵
- 二、〈大庭葉蔵〉とは何者か
- 三、〈二階〉と〈女性〉
- 四、〈母〉の不在と〈父〉の肥大化
- 五、『聖書』的言説と父なる「エホバ」
おわりに——〈陰画〉としてのイエス像〈

『人間失格』は太宰の自叙伝などではない。葉蔵は不思議なことに〈食欲〉と〈性欲〉がないかのように設定され、また、年上の女性たち（母子家庭が多い）といつも〈二階〉に漂うかのように存在している（中学の下宿、東京の下宿、シズ子のアパート、京橋のバア）。しかし、年下の唯一結婚するヨシ子との生活の場のみ、葉蔵は〈一階〉に降りて来る。その背景には福音書のイエスがいる。この場合、「父」は旧約の「エホバ」に他ならない。「父神」は現実の《リアリズム》を指向するが、「神の子」葉蔵は天上的な《ロマンチズム》で動く。しかし、この《ロマンチズム》は《リアリズム》に敗北する。そのような、もう一つの《陰画》としてのイエス伝、つまり昭和という《現代に降り立ったイエスの伝記》が『人間失格』というテキストである。

はじめに

太宰治——『人間失格』——。と来れば、〈自叙伝〉——。という連想が自然に働くほど、この作品は、作者太宰の人生を辿る「伝記」として受容されて来たようである。しかし、果たして、この作品は本当に作家太宰治の実人生をトレースしたものののだろうか。太宰と津島修治の現実と、主人公「大庭葉蔵」の半生を対応させてみると、実は似ても似つかない事実に突き当たることになる——。本稿では、先ず前段として、太宰治＝大庭葉蔵という図式ではこの作品は〈読めない〉ことを述べ、その上で改めて「大庭葉蔵」とは何者なのか、そしてこの『人間失格』とはどのようなテキストなのかを考察することにした。

一、太宰治と大庭葉蔵

太宰治と津島修治の人生上の事実を、主人公大庭葉蔵と比較して見ると、奇妙なことが数多く出て来る。

例えば、太宰は青森中学四修で弘前の高等学校に入学している（昭和二年）¹。しかし、葉蔵は中学から直接東京の恐らくは第二高等学校と思われる高校に入っている。一見同じように思われるが、太宰は（数え）二十二歳での上京であるのに反し、葉蔵は十八歳程で東京にやってきている

のである。多分この四歳の開きは大人と子供の差に比していいように大きいと思われる（本稿「おわりに」参照）。また、太宰の父、源右衛門氏は、確かに議員をしていたが、東京ではほぼ神田の旅館（龍名館）²を定宿にしていた。しかし、『人間失格』の方では、何と別荘を持っている、と描かれている。ただでさえ金持ちのお坊っちゃんを何故このように、より金持ちに造型するのだろうか。

更に、津島修治は東京帝大に入学した一年目の昭和五年、鎌倉の海岸で心中をしている。彼は二十二歳、相手の女性は年下の十九歳³だった。ところが大庭葉蔵は、

高等学校に入学して二年目の十一月、自分より年上の有夫の婦人と情死事件などを起こし、⁴

（第二 傍線引用者、以下同じ）

ている。上京してから二年目に、「自分より二つ年上」（第二）の女性と事件をおこさなければならなかったのは、この作品においてどのような力学が働いたからだろうか。

ところで、この「情死事件」の後日談として、『人間失格』には次のようなエピソードが綴られている。しばらく、長い引用が続くが、大事な箇所なので取り上げておきたい。

しかし、その時期のなつかしい思ひ出の中にも、たった一つ、冷汗三斗の、生涯わすれられぬ悲惨なしくじりがあつたのです。自分は、検事局の薄暗い一室で、

検事の簡単な取調べを受けました。検事は四十歳前後の物静かな、(もし自分が美貌だつたとしても、それは謂はば邪淫の美貌だつたに違ひありませんが、その検事の顔は、正しい美貌、とても言ひたいやうな、聡明な静謐の氣配を持つてゐました) コセコセしない人柄のやうでしたので、自分も全く警戒せず、ぼんやり陳述してゐたのですが、突然、れいの咳が出て来て、自分は袂からハンケチを出し、ふとその血を見て、この咳もまた何かの役に立つかも知れぬとあさましい引きの心を起し、ゴホン、ゴホンと二つばかり、おまけの贗の咳を大袈裟に附け加へて、ハンケチで口を覆つたまま検事の顔をちらと見た、間一髪、

「ほんたうかい？」

ものしづかな微笑でした。冷汗三斗、いいえ、いま思ひ出してもきりきり舞ひをしたくなります。中学時代に、あの馬鹿の竹一から、ワザ、ワザ、と言はれて背中を突かれ、地獄に蹴落された、その時の思ひ以上と言つても、決して過言では無い氣持です。あれと、これと、二つ、自分の生涯に於ける演技の大失敗の記録です。検事のあんな物静かな侮蔑に遭ふよりは、いつそ自分は十年の刑を言ひ渡されたほうが、ましだつたと思ふ事さへ、時たまある程なのです。(第二)

ここに登場する検事は「四十歳前後の物静かな」人物であり、「聡明な静謐の氣配」と「ものしづかな微笑」で應對している。一方、葉蔵は「大袈裟」に「ハンケチ」を小道具に使つてまで「演技」をするのである。それを見破られた葉蔵は「十年の刑」よりも「悲惨なしくじり」を感じる。ここには、「正しい美貌」の検事対「邪淫の美貌」の葉蔵という激しい落差を思わせる構図がある。

ところが、実はこのエピソードは、十年以上も前に『若草』(昭和十二年三月号)の「あさましきもの」で使われていたものであつた。

その男は、甚だ身だしなみがよかつた。鼻をかむのにさへ、両手の小指をつんとそらして行つた。洗練されてゐる、と人もおのれも許してゐた。その男が、或る微妙な罪名のもとに、牢へいれられた。牢へはひとつも、身だしなみがよかつた。男は、左肺を少し悪くしてゐた。

検事は、男を、病氣も重いことだし、不起訴にしてやつてもいいと思つてゐたらしい。男は、それを見抜いてゐた。一日、男を呼び出して、訊問した。検事は、机の上の医師の診断書に眼を落しながら、

「君は、肺がわるいのだね？」

男は、突然、咳にむせかへつた。こんくく、と

三つはげしく咳をしたが、これはほんたうの咳であつた。けれども、それから更に、こん、こん、と二つ弱い咳をしたが、それは、あきらかに嘘の咳であつた。身だしなみのよい男は、その咳をしすましてから、なよ／＼と首をあげた。

「ほんたうかね」能面に似た秀麗な検事の顔は、薄笑ひしてゐた。

男は、五年の懲役を求刑されたよりも、みじめな思ひをした。男の罪名は、結婚詐欺であつた。不起訴といふことになつて、やがて出牢できたけれども、男は、そのときの検事の笑ひを思ふと、五年のちの今日こんにちでさへ、ゐても立つても居られません、と、やはり典雅に、なげいて見せた。男の名は、いまになつては、少し有名になつてしまつて、ここには、わざと明記しない。

ここでは検事は「能面に似た秀麗な」顔をし、あざ笑うかのように「薄笑ひ」までしている。「人間失格」の検事の造型とはだいぶ異なっているのがわかる。また、『人間失格』の「十年の刑」がこちらでは「五年」になつているのも注目される。「膺の咳を大袈裟に附け加へ」る葉蔵と、「こん、こん、と二つ弱い咳」をする「身だしなみのよい」ある男との対比は鮮やかである。

では、次のエピソードはどうであらうか。それは、「第

三の手記」の「一」末尾に描かれている、葉蔵が「信頼の天才」(第三・二)ヨシ子と結婚するに至る契機が語られている一節である。葉蔵は飲み過ぎてマンホールに落ち、ヨシ子に助けられ、その時、酒を断つことを約束する。

「やめる。あしたから、一滴も飲まない。」

「ほんたう？」

「きつと、やめる。やめたら、ヨシちゃん、僕のお嫁になつてくれるかい？」

(略)

さうして翌る日、自分は、やはり昼から飲みました。夕方、ふらふら外へ出て、ヨシちゃんの店の前に立ち、

「ヨシちゃん、ごめんね。飲んぢやつた。」

「あら、いやだ。酔つた振りなんかして。」

ハツとしました。酔ひもさめた気持でした。

「いや、本当なんだ。本当に飲んだのだよ。酔つた振りなんかしてるんぢやない。」

「からかはないですよ。ひとがわるい。」

てんで疑はうとしないのです。

「見ればわかりさうなものだ。けふも、お昼から飲んだのだ。ゆるしてね。」

「お芝居が、うまいのねえ。」

「芝居ぢやあないよ、馬鹿野郎。キスしてやるぞ。」

「してよ。」

「いや、僕には資格が無い。お嫁にもらふのもあきらめなくちやならん。顔を見なさい、赤いだらう？ 飲んでのだよ」

「それあ、夕陽が当つてゐるからよ。かつがうたつて、だめよ。きのふ約束したんですもの。飲む筈が無いぢやないの。ゲンマンしたんですもの。飲んでなんて、ウソ、ウソ、ウソ。」

(第三・一)

葉蔵は禁酒の約束をするものの、「翌る日」には飲みだし、「夕方」「夕陽」の中でヨシ子に詫びている。「信頼の天才」ヨシ子は全く疑おうとはしない。このエピソードは次節においてヨシ子がその「無垢の信頼心」の故に犯される伏線にもなっているのである。ともあれ、この場面を紹介して葉蔵はヨシ子と結婚（内縁）することになる。

ところが、この重要なエピソードも、先の「あさましきもの」で使われていたものであった。

たばこ屋の娘で、小さく、愛くるしいのがあつた。男は、この娘のために、飲酒をやめようと決心した。娘は、男のその決意を聞き、「うれしい」と呟いて、うつむいた。うれしさうであつた。「僕の意志の強さを信じて呉れるね？」男の声も真剣であつた。娘はだま

つて、こつくり首肯いた。信じた様子であつた。

男の意志は強くなかつた。その翌々日、すでに飲酒を為した。日暮れて、男は蹣跚、たばこ屋の店さきに立つた。

「すみません」と小声で言つて、びよこんと頭をさげた。真実わるい、と思つてゐた。娘は、笑つてゐた。

「こんどこそ、飲まないからね」

「なにさ」娘は、無心に笑つてゐた。

「かんにんして、ね」

「だめよ、お酒飲みの真似なんかして」

男の酔ひは一時にさめた。「ありがたう。もう飲まない」

「たんと、たんと、からかひなさい」

「おや、僕は、僕は、ほんたうに飲んでゐるのだよ」

あらためて娘の瞳を凝視した。

「だつて」娘は、濁りなき笑顔で応じた。「誓つたのだもの。飲むわけないわ。こゝではお芝居およしなさいね」

てんから疑つて呉れなかつた

男は、キネマ俳優であつた。岡田時彦さんである。先年なくなつたが、ぢみな人であつた。あんな、せつなかつたこと、ございませんでした、としんみり述懐

して、行儀よく紅茶を一口すゝった。

ここでは、約束を破ったのは「翌々日」のことであり、男は「日暮れて」から娘の前に登場している。また、『人間失格』の直接体験の語りとは異なり、この挿話はさる人からの伝聞という設定で叙述されている。ところで、ここに実名で登場してきている「岡田時彦さん」とは、女優岡田茉莉子氏の父君である。各種の解説があるが、ここでは猪俣勝人氏の「岡田茉莉子」についての解説を参考にする。

ととのつた顔立ちの美人だが、いかにも気の強そうな女優さんである。彼女の生まれは昭和八年一月十一日の東京で、本名は田中鞠子^{まりこ}。父親はかつての日本映画界の二枚目スター・岡田時彦であり、彼は昭和九年一月に三十二歳で亡くなった。鞠子が一歳の誕生日をむかえたばかりのことであつた。

多分、「あさましきもの」での娘の言う「お芝居」は男が「キネマ俳優」だから生きてくるのだと思われる。つまり、信じてしまうのは男の側が演技のプロだからなのであり、その意味ではこの娘に限らず、他の者でも疑わないかもしれないのだ。しかし、このエピソードが『人間失格』に取り込まれると、葉蔵の「お芝居」を嘘と見なす要因は、葉蔵自身ではなく、ヨシ子の方にあることになる。ともあれ、この解説によれば、「あさましきもの」が発表され

た昭和十二年には、確かに「先年なくなつた」人であつたといえよう。

ところで、津島修治と大庭葉蔵の大きな違いは、父親の「死」の時期である。太宰の父源右衛門氏は、大正十二年の三月、東京で亡くなつてゐる。太宰（数え）十五歳の年、青森中学へ入学する前の月であつた。しかし、『人間失格』では父の死は、葉蔵が脳病院に入院した、二十四歳の年（昭和十年）のことになつてゐる。一体なぜ、このようにわざわざしつらえる必要があつたのだろうか（この点に關しては、本稿「五」参照）。

またこれは、いささか小さな点ではあるが、次のような相違も指摘できるように思われる。それは、隨筆として描かれてゐる「容貌」（『博浪沙』昭和十六年）についての見解である。

私の顔は、このごろまた、ひとまはり大きくなつたやうである。もともと、小さい顔ではなかつたが、このごろまた、ひとまはり大きくなつた。美男子といふものは、顔が小さくきちんとまとまつてゐるものである。顔の非常に大きい美男子といふのは、あまり実例が無いやうに思はれる。想像する事も、むづかしい。顔の大きい人は、すべてを素直にあきらめて、「立派」あるいは「莊嚴」あるいは「盛観」といふ事を心

掛けるより他に仕様がないうである。

無論、こういった自己認識の度合いなど、測り難いのは事実である。しかし、『人間失格』で強調されている、「美貌」の青年葉蔵の造型が、極端であることだけは無視できないように思われる。

・ おそろしく美貌の青年（はしがき）

・ キヌさん、こいつは美男子だらう？（第二）

・ おう、いい男だ。これあ、お前が悪いんぢやない。こゝな、いい男に産んだお前のおぶくろが悪いんだ。

（第二）

・ もし自分が美貌だつたとしても、それは謂はば邪淫の美貌だつたに違いありませんが、（第二）

確かにこれらの例は、臼井吉見氏が作者本人から聞いた「ネガティブのドン・ファン」の側面を作るために付与された造型であるかもしれない。が、しかし、「思ひ出」の主人公の容貌の醜さの悩みや、「カチカチ山」の狸の氣にする容貌の系列からすると、やはり奇異な人物造型のように考えられよう。

以上のように作家の実人生と作中人物の設定を対比させて見ると、葉蔵イコール太宰では片付かない問題が様々に出てくることがわかる。むしろ、ここでは一度、作者太宰・生身の津島修治という人物のファクターを作品からは

ずし、テキスト自体の中で、改めて考察する必要性に迫られてくるのである。

二、〈大庭葉蔵〉とは何者か

この作品には数々の疑問が封印されているように見える。実際不思議なことだが、この作品の発表された昭和二十三年当時、日本中はどこも「飢えて」いた。例えば、毎日新聞社刊『決定版 昭和史』十三（廃墟と欠乏 昭和二十一—二十五年）には、「買い出し部隊決行」の小見出しで、「取り締まりの目を逃れ 日曜や休日を返上してリュックだけが頼りの日が長く続いた」写真が掲載され、また「戦災孤児と地下道の住人たち」の食べる物と住む所を奪われた現場も収録されている。が、「大庭葉蔵」はこの手記の中で、殊更食べることに執着しない。否、むしろ「食欲」の無さを強調しているように見えないだろうか。確かに、手記の内的な時間は戦前であり、かつて整理したもの（^①）によれば、葉蔵の東京で生活は昭和五年の春から昭和十年の秋までの五年半である。しかし、

・ 自分は、空腹といふ事を知りませんでした。

・ 自分には『空腹』といふ感覚はどんなものだか、さっぱりわからなかつたのです。

・ 空腹感から、ものを食べた記憶は、ほとんどありません

ん。

(第二)

という箇所を、「空腹」を抱えた当時の一般読者はどう読んだのだろうか。食料難の時世は、この作品の「あとがき」に登場する作者らしき男が、わざわざ船橋までリュックをかつぎ買い出しに来ていることから知れることだ。このことは、銀座裏の寿司屋での述懐を見ても同様である。

もともと、自分は、うまい鮎を食はせる店といふところに、ひとに連れられて行つて食つても、うまいと思つた事は、一度もありませんでした。大き過ぎるのです。親指くらゐの大きさにキチツと握れないものかしら、といつも考へてゐました

(第二)

という感慨などは、戦後の世相をことさらに逆撫でしているかのようである。

多分そのことと、密接な関係にあると思われる、もう一つの非現実的な特色は、次のような箇所である。

(略)たとへば、喫茶店の女から稚拙な手紙をもらつた覚えもあるし、桜木町の家の隣の將軍のはたちくらの娘が、毎朝、自分の登校の時刻には、用も無ささうなのに、ご自分の家の門を薄化粧して出たりはひつたりしてゐたし、牛肉を食ひに行くと、自分が黙つてゐても、その女中が、……また、いつも買ひつけの

煙草屋の娘から手渡された煙草の箱の中に、また、歌舞伎を見に行つて隣の席のひとに、……また、深夜の市電で自分が酔つて眠つてゐて、……また、思ひがけなく故郷の親戚の娘から、思ひつめたやうな手紙が来て、……また、誰かわからぬ娘が、自分の留守中にお手製らしい人形を、……自分が極度に消極的なので、いづれも、それつきりの話で、ただ断片、それ以上の進展は一つもありませんでしたが、何か女に夢を見させる雰囲気、自分のどこかにつきまとつてゐる事は、それは、のろけだの何だのといふいい加減な冗談でなく、否定できないのであります。

(第二)

確かにこれだけ女性にもてれば、誰しもかえつて困るのかもしれない。葉蔵は、女性なら誰でも頼ずりしたり、手をつねつてやりたくなる、愛くるしい幼子のようなのである。無論、葉蔵は青年としてここでは設定されているので、それは「女に夢を見させる雰囲気」という説明の仕方を取っている。が、当時の読者の中にもやはり、いい気なものだ、という感想があつたとしても不思議ではない。同時代評として、宮本顕治氏は『人間失格』その他⁽¹²⁾の中で「恋愛というより衝動的関係」を結び、「転々とした色情関係」が次々に設定されている点をシニカルに指摘している。氏の結論の可否は別としても、やはり、なにやらこの世なら

ぬ、一種の昔物語の主人公めいた側面を葉蔵が持たされていることだけは確かであろう。

このように見てくると、ここで述べられている大庭葉蔵という人物に付与された性格付けは、明確な特徴を帯びて来るように思われる。彼は、食べることに執着しないし、これだけ女性にもとても積極的にその対象に向かおうとはしない。有り体に言えば、この「大庭葉蔵」という人間は「生物の二大特徴」である、「食欲」を欠落させ、且つ「性欲」をも欠いている人物なのだ。つまり、「個体維持の能力」である食欲と、「種族保存の能力」である性欲を持たずにこの世に生まれてきたのである。換言すれば、葉蔵は「生物（特に動物）」としての根源的な「欲」を除き去った、あたかも肉体を持たないかのような存在として設定されている、ということである。このことは葉蔵自身によって次のように述べられている。「自分は無だ、風だ、空だ」（第一）というように。

そして恐らく、彼のこのような在り方は、この作品に登場してくる、〈動物〉の暗喩^{メタファー}の表現が異常に多いということとパラレルの関係にあると思われる。そのような意味では、葉蔵には、『鳥獣戯画』の世界にあつて、動物に取り巻かれた〈幼子〉、というたとえが似つかわしい。

三、〈二階〉と〈女性〉

もし、葉蔵に「生物（動物）」としての二大特徴が、ないとしたら、葉蔵のいる場所はあるのだろうか。不思議なことに、彼はいつも〈二階〉にいる。

中学の下宿では、

- ・ 竹一を二階の自分の部屋に誘ひ込むのに成功しました。
- ・ 自分が中学時代に世話になつたその家の姉娘も、妹娘も、ひまさへあれば、二階の自分の部屋にやつて来て、

（第二）

とあるように「二階」である。

このことは、東京の下宿屋「仙遊館」においても、

「ごめんなさい。下では、妹や弟がうるさくて、ゆつくり手紙も書けないのです」

（第二）

という、下宿の娘の言葉から「二階」に住んでいることがわかる。

また、銀座の大カフェの女給「ツネ子」の部屋に葉蔵は一緒に行くが、そこも、

本所の大工さんの二階を、そのひとが借りてみました。自分は、その二階で、日頃の自分の陰惨な心を少しもかくさず、ひどい歯痛に襲はれてでもゐるやうに、片手で頬をおさへながら、お茶を飲みました。（第二）

というように「二階」となっている。

このことは、ツネ子との心中の後、骨董商をしているヒラメの家に引き取られても同じである。

・ただ、朝から晩まで二階の三畳のこたつにもぐつて、
・ヒラメの家では食事はいつもその小僧がつくり、二階のやくかい者の食事だけは別にお膳に載せて小僧が三度々々二階に持ち運んできてくれて、ヒラメと小僧は階段の下のじめじめした四畳半で何やら、カチャカチャ皿小鉢の触れ合ふ音をさせながら、いそがしげに食事してゐるのでした。

(第三・一)

ここで特に注目されるのは、「やくかい物」「居候」は「二階」に、そして生活者は「階段の下」にゐることである。

ともあれ、葉蔵の「二階」暮らしは、次の女記者シズ子の中でも続く。

アパートの窓のすぐ近くの電線に、奴風が一つひつからまつてゐて、春のほこり風に吹かれ、破られ、それでもなかなか、しつこく電線にからみついて離れず、何やら首肯いたりなんかしてゐるので、自分はそれを見る度毎に苦笑し、赤面し、夢にさへ見て、うなされた。

(第三・一)

つまり、窓を開けると直ぐそこに電線がある、そういう

高きの部屋にゐる、ということである。そこから「二階」であることがわかる。ちなみに、ここでの「奴風」は、あたかも、女のヒモのような存在として、ふらふらしている葉蔵の暗喩である。

しかし、葉蔵はここにも落ちつけず、京橋のスタンド・バアのマダムを頼り、シズ子のアパートをそとと抜け出す。高円寺のアパートを捨て、京橋のスタンド・バアのマダムに、

『わかれて来た』

それだけ言つて、それで充分、つまり一本勝負はきまつて、その夜から、自分は乱暴にもその二階に泊まり込む事になつた

(第三・一)

という。ここでも、「得態の知れない存在」(第三・一)は「二階」にゐることになっている。しかし、「世の中に対して、次第に用心しなく」なつた葉蔵は、階下の店に出てつまりは、上から下へ降りて来て、「お客に向つて酔つてつたない芸術論を吹きかけるやうにさへ」なつてゐる。

ところが、この作品の中で唯一、葉蔵が「一階」に降りてきて生活を営んでいるケースがある。それは、京橋のバアのマダムの所を出た後、煙草屋の娘ヨシ子と結婚生活をする場面である。

(略) さうして築地、隅田川の近く、木造の二階建て

の小さいアパートの階下の一室を借り（第三・一）

て、つかの間の新婚生活を送ることになった。「木造の二階建ての小さいアパートの階下の一室」という、如何にも「階下」に拘泥した言い方が、印象的である。しかし、どのみち葉蔵には「階下」での生活、つまり現実的な生活など出来るはずはない。その甘さは、ヨシ子が「犯される」という形で、葉蔵に襲いかかつてくるのである。

『なんだ。』

異様に殺気立ち、ふたり、屋上から二階に降り、二階から、さらに階下の自分の部屋へ降りる階段の途中で堀木は立ち止まり、

『見ろ！』

と小声で言つて指差します。

（第三・二）

この、「屋上」から「二階」、「二階」から「階下」へと、あたかも地の底に降りていくかのような、へ上―下への方向感覚に注目したい。確かに、「階下」は我々が生活を営んでいる地上の現世である。しかし、葉蔵にとつて、この「生活の場」は、地獄の底にも匹敵するものだった。仮に、葉蔵を「天上世界」から遣わされた「幼子」と想定してみると、このヨシ子が犯される前後の屋上の場面で、葉蔵の取る妙な所作もある意味あい帯びてくるように思われる。それは、次のような一節である。

両手を頭のうしろに組んで、仰向けにころりと寝ました。

無論、ここでは自然な姿勢のように見えるが、しかし、ヨシ子が犯された後も再び、同じような所作を葉蔵はしているのである。

自分は、ひとり逃げるやうにまた屋上に駆け上り、寝ころび、雨を含んだ夏の夜空を仰ぎ、そのとき自分を襲つた感情は、怒りでも無く、嫌悪でも無く、また、悲しみでも無く、もの凄まじい恐怖でした。

（第三・二）

どうやら、葉蔵は「天」に向かつているようである。そして、その後、彼は「神に問う。信頼は罪なりや。」と言う。あたかも、「桜桃」に引かれてゐる「われ、山にむかひて、目を挙ぐ。（詩編、第百二十二）」かのように。

ともあれ、葉蔵は奇妙なことに、「二階」という地上から遊離した空間に存在していた。が、ヨシ子との結婚生活の時のみ、「階下」という生活の場に降りて来たことになっている。なぜこの作品はそのような世界として構築されているのだろうか。

そのことと強い関連を持っているのが、葉蔵に関わる女性達の年齢である。ヨシ子を除き、他はみんな葉蔵より「年上の女性」になっていることである。この点に関して

は、つとに東郷克美氏が「人間失格」の「渴望」で「これらの女たちのほとんどが年上の女であるのは留意しておいてよいことである。」と指摘している。

確かに、中学の下宿では、

その家には、五十すぎの小母さんと、三十くらゐの、眼鏡をかけて、病身らしい背の高い姉娘（この娘は、いちどよそへお嫁に行つて、それからまた、家へ帰つてゐるひとでした。自分は、このひとを、ここの家のひとたちにならつて、アネサと呼んでゐました）それと、最近女学校を卒業したばかりらしい、セツちゃんといふ姉に似ず背が低く丸顔の妹娘と、三人だけの家族で、下の店には、文房具やら運動用具を少々並べてゐましたが、主な収入は、なくなつた主人が建てて残して行つた五六棟の長屋の家賃のやうでした。（第一）というように、小母さんと二人の年上の娘に囲まれて生活している。

そして、また東京の「女子高等師範の『同志』」も、「私を本当の姉だと思つてゐてくれていいわ」と言っている。

さらに、心中の相手になつた「ツネ子」は、実人生の二歳年下の「田部シメ子」を仮にモデルにしたとしても、

一緒にやすみながらそのひとは、自分より二つ年上であること、故郷は広島、あたしには主人があるのよ、

広島で床屋さんをしていたの、去年の春、一緒に東京へ家出して逃げてきたのだけれども、主人は、東京で、まともな仕事をせずそのうちに詐欺罪に問われ、刑務所にいるのよ、（第二）

というように、わざわざ「二つ年上」に設定している。ちなみに、「あさましきもの」に登場する「身だしなみ」のいい男の罪名が（結婚）「詐欺」であつたのと似通っている。

ここに煩を厭わずにもう一人挙げれば、それは女記者の「シズ子」である。

女は、甲州生れで二十八歳でした。五つになる女児と、高円寺のアパートに住んでいました。（第二）

この時、葉蔵はまだ、二十一歳ほどではない。（第三）
外に、京橋のバアのマダム。あるいはまた、葉屋の奥さん。さらには田舎での療養生活でのテツなどがある。

ここに挙げた、多くの「年上の女性たち」と、（二階）であることとの関係は偶然ではなさそうである。さらに特徴的なのは、中学の下宿にしろ、シズ子のアパートにしろ、また、葉屋の奥さんの所にしろ、「母子（娘）家庭」である、という点も単なる偶合ではありえない。特に中学の下宿は、母一人年上の娘二人の家庭である。この点は、太宰が青森中学時に下宿した「山太呉服店」こと豊田太左衛門

方とはだいぶ異なっている。例えば、相馬正一氏の『評伝太宰治』第一部の「生い立ち 二」によれば、

通人だった当主太左衛門は太宰をことのほか可愛がり、時折太宰を誘って外出しては行きつけの小料理屋などに立ち寄り、食事を共にしたものだという。

しかし、『人間失格』の世界は作者太宰の現実ではない。作品において、葉蔵はいずれも〈父親〉不在の家庭に入り込んでいるのである。このような「母子（娘）家庭」という設定は、なにも『人間失格』だけにかぎらない。前作『斜陽』もそうであったし、中期の「富嶽百景」も、あるいは「女生徒」も同様の設定になっていた。詳しくは機会を改めたいが、ここには単に素材となつたモデル側の事情だけではすまされない、ある問題が潜んでいると思われる。ともあれ、ここで葉蔵は「母子（娘）家庭」に入るものの、しかし、〈父親〉にはならない。それはシズ子のアパートで、若いシズ子と交わす会話に明らかである。なぜ、〈父親〉にはならぬのか。それには、後段六節に述べる〈父性〉の問題を抜きにしては、明らかにできない。ここでは、なぜ唯一年下の女性ヨシ子との生活だけが、「階下」とされるのであろうか、という点について触れておきたい。それは、この場合のみ葉蔵は一家の主としての役割を必然的に受け持たされるからである。即ち、それは「戸

主」となることであり、そこから〈父〉なるものへはほんの半歩である。彼も、一度は「生活」らしきものを経験しなければならなかった。そのような意味において、ヨシ子のみは「年下」に設定されたのだと思われる。無論、それは現実から手痛いしっぺ返しとして、ヨシ子が犯されるという形をとろうとも。

四、〈母〉の不在と〈父〉の肥大化

前節で「年上の女性像」について考えてみたが、女性とえば、先の東郷氏も指摘しているように〈母〉なるものがこの作品においては非常に希薄である。「母」という言葉が出てこないわけではないが、この中で葉蔵の〈母〉は動いていない。

「はしがき」の幼年時代の写真は、「大勢の女のひとに取りかこまれ」たものではあるが、「姉たち、妹たち、それから、従姉妹たちかと想像される」とある。ここに「母」はいない。また、子供のころ、家で「お茶目」をするが、出てくるのは、「長兄」「父」「次兄」「下男下女」であり、母は影のごとき存在でしかない（第二）。あるいは、葉蔵が、ツネ子の件で「海辺の病院に収容せられ」ても、故郷からは、「親戚の者がひとり駆けつけ」ただけであり、肝心の「母」はここでも全く動いていない（第二）。さら

に、東京でひとり暮らしを始めた葉蔵が、お金の無心を頼むのは「父、兄、姉」(第二)であって、「母」ではない。そして、決定的な場面は次のような一節である。

この地獄からのがれるための最後の手段、これが失敗したら、あとはもう首をくくるばかりだ、といふ神の存在を賭けるほどの決意を以て、自分は、故郷の父あてに長い手紙を書いて、自分の実情一さいを(女の事は、さすがに書けませんでした)告白する事にしました。(第三・二)

これほど切羽詰まった時、普通息子が頼むのは、父であるよりは「母」の方が自然ではなからうか。しかし、『津軽』の「私」における「タケ」とは異なり、葉蔵には、彼を癒し、救い取ってくれるはずの「母」なるものはいない。その代わりに夥しく登場してくるのが、年上の女性たちである。彼女たちは、実は「母」の代理なのだ。しかし、代理は所詮「代理」でしかない。葉蔵を救済してくれる「聖母」は不在である。

そして動かない「母」の替わりに出てくるのが、「父」である。父はこの物語の前面に登場して来ている。もし、実人生の軌跡をこの作品に見るのであれば、そもそも源右衛門氏は、太宰が中学に入る前に亡くなっているのに、葉

蔵が父の選択で中学に入ったり、あるいは四修で東京の高等学校を受けよ、という命令を父が出せるはずはない。がこの作品の中では、葉蔵の父親は健在である。

東京土産の「獅子舞」のことでの一節において、彼は次のような思いに襲われる。

何といふ失敗、自分は父を怒らせた、父の復讐は、きつと、おそるべきものに違ひない、(第一) この「父の復讐」とは一体何であろうか。いくら「恐い」としても、「復讐」という言い方はあり得るのだろうか。

さらに、中学の進学にしても、「父がその海と桜の中学校を自分に選んでくれたのでした。」(第二)というありさまであり、高校の進路にしても、「父は、前から自分を高等学校に連れて、末は官吏にするつもりで、自分にもそれを言ひ渡してあつた」(第二)という。

また、先に触れたように「神の存在を賭けるほどの決意を以て、自分は、故郷の父あてに長い手紙」(第三・二)を書くのもなにやら曰くありげである。続いて、

父が死んだ事を知ってから、自分はいよいよ腑抜けたやうになりました。父が、もうゐない、自分の胸中から一刻も離れなかつたあの懐しくおそろしい存在が、もうゐない、自分の苦悩の壺がからつぽになつたやう

な気がしました。自分の苦悩の壺がやけに重かつたのも、あの父のせみだつたのではなからうかとさへ思はれました。まるで、張合ひが抜けました。苦悩する能力さへ失ひました。

(第三・二)

という、脳病院入院後に知らされる「父の死」に対しての述懐は、まるで「父」の存在が、葉蔵の在り様を規定していたかのような印象を与えている。

このようにこの物語は〈母〉の不在に貫かれ、〈父〉のみが強調されているように見える。しかも、「あとがき」に再度登場するバアのマダムが「あの人のお父さんが悪いのですよ」といい、「神様みたいないい子でした」とまで回想されている。ここで作品は閉じられるが、しかし、なぜ「お父さんが悪い」のか、それは明らかにほされていい。ここでも、また袋小路に入ったかのような疑問にぶつかるのである。

五、『聖書』的言説と父なる「エホバ」

以上のように、「食欲」「性欲」という動物的な「欲」を持たず、年上のいわば、代理の〈母〉に関わる形で〈二階〉という空中にいて、ヨシ子との生活の時のみ一時的に地上に降り、まるで「父」の影に脅かされているかのよう

に半生を送っている、この葉蔵という存在は一体何者なのか。そのように考えていつて見たとき、それと重なり合ってくるのが、どうやら『聖書』、特に「新約聖書」との関わりのようなのだ。

「第一の手記」からして

・へえ？ お前はいつクリスチャンになつたんだい、と嘲笑する人も或いはあるかもしれませんが、人間は、お互いの不信の中で、エホバも何も念頭に置かず、平気で生きてゐるではありませんか。(傍点原文のまま)

と語られている。のみならず、肉親と他人、故郷と他郷、そこには抜くべからざる演技の難易の差が、どのやうな天才にとつても、たとひ神の子のイエスにとつても、存在してゐるものなのではないでせうか。

(第二)

というところにも『聖書』的言説が散見されるのである。また、中学の竹一のエピソードでは、「顔に偽クリスチャンのやうな『優しい』媚笑を湛へ」て彼を誘っている。そして、この竹一から、

惚れられるといふ予言と、偉い絵画きになるといふ予言と、この二つの予言を馬鹿の竹一に依つて額に刻印せられて、やがて、自分は東京へ出てきました。

(第二)

と言っている。無論、『聖書』における「神の言葉を預かる預言」と「未来を見通す予言」とはその意味あいはいささか異なるものの、「額に刻印」されるのは、人類最初の殺人と称される弟アベル殺しによる兄カインの罪の印(旧約『創世記』第四章)に他ならない。この比喩は最後の脳病院のエピソードにおいても、「廃人といふ刻印を額に打たれる事でせう。」(第三・二)という形で出てきている。

それ以外にも、「淫売婦たち」に「マリヤの円光」を見、堀木からは「お前には、どこかヤソ坊主くさいところがあるからな。」(第三・二)とも言われている。

つまり、この『人間失格』というテキストは、思った以上に聖書との関わりが深部に達しているのである。特にこの物語の掉尾を飾るマダムの言葉「神様みたいな子でした」は決定的である。それはあたかも葉蔵が「神の子イエス」であるかのように聞こえはしないだろうか。

奇妙なことに、この作品には以下のような聖書との対応があるようである。

言うことを聞かなければソドムやゴモラなどの町のみならず、人類そのものでさえも滅ぼしかねない旧約の「怒る」神、即ち「天の父」なるエホバと、葉蔵にあつてはそ

の意向に添わなければ「復讐」さえされかねない「故郷の父」との類似。

「食物」に関しても、周知のようにイエスは「神のパンは天より降りて生命を世に与ふるものなり」(ヨハネ六)と言う。現実の「パン」つまり「食物」ではなかった。葉蔵の「食欲」の無さが強調される所以である。

イエスは「預言」によつて「イエス」と名付けられ、エジプトへ逃れるのも「預言者」の「言の成就せん為」(マタイ二)であつた。葉蔵の方は竹一に二つの「予言」をもらつて上京するのである。

また、イエスの回りには女性が多い。「その処に遙かに望みゐたる多くの女あり、イエスに事へてガラヤより従ひ来たりし者どもなり。その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ及びゼベタイの子らの母などもゐたり。」(マタイ二七)というように、イエスもあまたの女性たちに取り巻かれてゐる。葉蔵の場合は先に述べたとおりである。が、女性と言つてもイエスには「母」なる存在も含まれている点が葉蔵とは異なる。

「幼児性」に関しても、イエスは「幼児^{をまご}らを許せ、我に來たるを止むな、天国は斯のごとき者の国なり」(マタイ一九)と弟子たちをたしなめている。葉蔵も「幼児性」を多分に持っている青年であつた。無論その「幼児性」は、

現実に対応していく処理能力の欠如というネガティブな「幼児性」であるが、本稿の「一」で触れたように、葉蔵を高等学校から東京に来させた大きな理由は、この「幼児性」を示すためだったと思われる。

さらに、イエスの言う「なんぢらは下より出で、我は上より出づ、なんぢらは此の世より出で、我はこの世より出でず。」(ヨハネ八)などは、葉蔵が極めて抽象的ないわば「霊的」な存在に近く、「欲」を欠如した造型になっていることに関わっているようである。

ヨシ子が犯された後、葉蔵は「信頼は罪なりや」と「神」に問うている。無論、このエピソードは、後日葉蔵が脳病院に隔離される伏線でもあり、そこで彼はまた言う。「神に問う。無抵抗は罪なりや？」と。こうした箇所を、次の一節と比較してみるとどうなるだろうか。

祭司長・下役どもイエスを見て叫びいふ『十字架につけよ、十字架につけよ』ピラト言ふ『なんぢら自らとりて十字架につけよ、我は彼に罪あるを見ず』ユダヤ人こたふ『我らに律法あり、その律法によれば死に当るべき者なり、彼はおのれを神の子となせり』

(ヨハネ一九)

ローマの総督ピラトは「彼に罪あるを見ず」と言う。しかし、ユダヤ人は自らを「神の子」というイエスを許さな

かった。

その後、イエスは十字架上で刑死する。そして葉蔵は「脳病院」に入院。この時、キリストは父神に「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし」(マタイ二七・四六)と叫ぶ。一方葉蔵は入院直前、「神の存在を賭けるほどの決意」で父宛に救いを訴え、その後、脳病院に入り、間もなく父は死ぬ。「父が、もうゐない、自分の胸中から一刻も離れなかつたあの懐しくおそろしい存在が、もうゐない」。葉蔵の「父神」への訴えはどうやら、マタイ伝のイエスと同じように届かなかつたようである。この一節が、「あとがき」のマグダムの言う「あの人のお父さんが悪いのですよ。」という一言につながっていることは述べるまでもない。

ところで、ここに塚本虎二氏の口語訳「新約聖書 福音書」がある。塚本虎二とは、内村鑑三の弟子であり、無教会主義者として、聖書理解の一助となるべく、雑誌『聖書知識』を昭和五年から発行していた(昭和二〇・六)クリスチャンである。太宰のキリスト教理解は、直接文語訳の聖書からもあるが、しかし、塚本氏の『聖書知識』という雑誌を媒介にしてなされていることも多い、と思われる。

次に引用したものは、昭和三八年に岩波文庫の方に口語

訳として出版された「福音書」の「附録」中「各書の標題」（小見出し）である。この中で特に「ヨハネ伝」の「標題」が注目される。⁽¹⁶⁾

ヨハネ福音書

はしがき——言葉^{ロゴス}

洗礼者ヨハネの証し

父なる神と子なるイエス

道、真理、命

ペテロ殉教の預言

あとがき

最初に「はしがき」が置かれ、最後に「あとがき」が来る。この挟み込みは、『人間失格』と同じ構成である。氏は、まだ日本に口語訳がない昭和のころから『聖書知識』に試訳をしていた。そこで試みに、初出誌⁽¹⁷⁾を確認して見ると、見込みとは違い、「はしがき」ではなく、「序言」（二五号 昭七・一）とあり、最後の章は「付記」（四五号 昭八・九）とある。従って、これは塚本氏が岩波文庫に入れる際に「はしがき」と「あとがき」という形にしたので、『人間失格』の構成上の下敷きとしては、一応除外しなけ

ればならないだろう。しかし、『人間失格』の梗概を整理した形で、塚本訳の福音書のどこかに置いたのなら、まさにこれは、もう一つのイエス伝とも読めそうである。

ともあれ、このように聖書との対比に注目して、『人間失格』を読み直して見ると、作品の仕組みと葉蔵の人物設定は鮮やかに浮かび上がって来る。結論を先取りして言えば、このテキストは聖書（福音書）を下敷きにした、もう一つの「イエス」物語なのだ。

おわりに——陰画としてのイエス像

既に述べたように、このテキストにおける〈父〉は実は神であり、これは旧約の「エホバ」と読んでいいように思われる。これは「怒る」神であり、地上的、現実的、父性原理で動くものである。そもそも〈父〉というものは「血族上の父」、つまり地上的な家父長制の父である場合もあるが、宗教上の神、つまりここでは「旧約の神」の姿をとって表れて来ているように考えられる。その場合、大事なイメージだと思われるが、「旧約の神」の相貌が奇妙なことに、「祭り」方が悪いと、天変地異や疫病を下す日本の古代の「荒々しい神」と重なって見えることだ。ともあれ「父の復讐」は、「神の罰」に他ならない。事実、葉蔵は幼いシゲ子と不思議な会話を交わしている。

自分は神にさへ、おびえてゐました。神の愛は信ぜられず、神の罰だけを信じてゐるのでした。信仰。それは、ただ神の答を受けるために、うなだれて審判の台に向ふ事のやうな気がしてゐるのでした。地獄は信ぜられても、天国の存在は、どうしても信ぜられなかつたのです。

「どうして、ダメなの？」

「親の言ひつけに、そむいたから」

(第三・一)

なぜ、「神の罰」が「親の言ひつけに、そむいた」息子に降り懸かってくるのか。この場合、「親」を「父神」に置き換えると、その意味も分かりやすいのではなからうか。即ち、「神の愛」とは「父の愛」であり、「神の罰」とはとりもなおさず「父の罰」なのである。

一方、葉蔵というのは実は、「神の子」であり、これは新約のイエスと考えられるのではないか。ここでのイエス（葉蔵）は、「弱い息子」であり、「天上的」「空想的な性格」を持ち、いわば大人に成り得ない永遠の青年像として指定されているように思われる。父親エホバの方は、リズムで動くが、息子イエスはロマンチズムで動こうとする。人と人との間に「信頼」が成り立つという前提がある故に、「不信」が生ずるのである。その面では、人と人との間に、真面目で偽りのない「信実」があるとする「走

れメロス」の世界を想起すればよい。ところが、リアリズムの世界は、暴君ディオニスのように「私利私欲のかたまり」で動く人間ばかりである。このような中において、この物語の主人公大庭葉蔵という人物は、この地上的な存在ではなく、天上的な「無菌室」にしか生息できない人物である。その意味では、極めて抽象的な存在であり、あたかも空中に漂っているかのような存在、実体を持ち得ない存在として描かれている。すなわち、そのようなことが、〈二階〉につねにいさせることになり、葉蔵がヨシ子と結婚という形をとつて〈一階〉に降りて来ると、それはたちまちヨシ子が犯されるという形になって、現実が葉蔵に襲いかかる。従つて、〈食欲〉がないという言説、即ち昭和二十三年という時代に向かつて、「空腹から物を食べたことがない」という非現実的な言説は、実は葉蔵自身の、〈この世ならぬ存在〉という設定がもたらしたものである。なおかつ女性に積極的に向かわない〈性欲〉の欠如も極めて生々しい動物的エネルギーを持つ現実的な存在として設定されていないからだ、といえよう。また、多くの年上の女性達が葉蔵を取り巻くが、この女性たちは、〈母〉の不在がもたらした「母」の代理である。しかし、所詮代理は代理でしかない。だから、葉蔵が如何に天上世界の「幼児」であろうとも、葉蔵を救い取るべき「聖母」は、この

作品には不在である。

このように考えていってみると、ドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』に挿入されている、イワン・カラマーゾフの語る劇詩「大審問官」のように、イエスが二十世紀の日本に降り立ったとしても不思議はない。また、『人間失格』とほぼ同時代に石川淳が「焼け跡のイエス」を発表している（昭二一・一〇『芸芸春秋』）。石川淳の戦後におけるイエスは、欲望をむき出しにして、焼け跡を生きている存在として描かれている。

太宰はここで全く違ったイエス像を提出した。それはリアリズムの現実には裏切られる（十字架にかかる）イエス像であり、昭和という《現代の日本に降り立ったイエスの伝記》である。つまりこれは太宰治の描いた、『陰画』としてのイエス像であると考えられるのである。

注

- (1)「父は、前から自分を高等学校にいられて、末は官吏にするつもりで、」(第二の手記——以下第二とする)とあることによる。
- (2)青森新聞社青森支局『津島家の人びと』(昭五六・六朝日ソノラマ)「第一章 地主貴族」中の「東京暮らし」によれば「源右衛門は、明治四十五年の衆院選挙で政友会の代議士に当選してからは、神田の龍名館を定宿に、東京暮らしが多くなった。」とい

う。

- (3)相手は大正元年二月二日生まれの「田部シメ子」という女性であった。長篠康一郎『太宰治七里ヶ浜心中』(広論社 昭五六・四)にその間の事情が詳述されている。

- (4)『人間失格』及び他の太宰関連のテキストは全て山内祥史編『初出』『太宰治全集』(筑摩書房刊)からの引用である(但し、旧字体は新字体に改めた)。

- (5)『全集』第二巻収録。なお、「あさましきもの」の「あさまし」は、現代語の「あさましい」(いやしい)ではなく、「枕草子」における「あさましきもの」を踏まえての発想であると思われる。従って「あきれる」や「意外」あるいは「興ざめ」といった語感であろう。

- (6)現代教養文庫九二七『日本映画俳優全史——女優編——』(一九七七・九 社会思想社)

- (7)『全集』別巻(一九九二・四)に「戸籍簿」が翻刻されている。その中の「除籍簿」によれば、「源右衛門」は「大正拾貳年参月



岡田茉莉子

四日午後四時東京市神田区小川町参拾参番地佐野病院ニ於テ死亡」となっている。

(8) 拙稿『「人間失格」論——「手記」と「あとがき」の〈時のしくみ〉をめぐる——』(筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』第七号 昭六二・六)参照。この論考では、主として作品内の時間系列に着目し、葉蔵の年齢と昭和の年代との対応を考察している。

(9) 『人間失格』初版(昭二三・七 筑摩書房)の白井吉見氏の「あとがき」による。

(10) 昭五八・十二刊

(11) 注(8)に同じ

(12) 初出は一九四九・一〇・一五付「学生評論」。但し引用は、山内祥史編『太宰治論集 同時代編』第一〇巻(一九九三・二 ゆまに書房)による。

(13) 『作品論 太宰治』昭五一・九 双文社刊

(14) 注(8) 参照

(15) 昭五七・五 筑摩書房刊

(16) 但し、引用はワイド版による。

(17) 神戸女学院大学図書館蔵

(付記) 本稿を成すにあたり、佛教大学の平成七年度「特別研究助成」(個人特定研究)を活用させて頂きました。末尾ながら、感謝申し上げます。

